

# 元代華北のモンゴル軍団長の家系

堤 一 昭

【要約】 一三世紀後半におけるモンゴル帝国と元朝の南宋征服戦は、その歴史的重要性から、戦争経過については研究がなされているが、戦争を実行した軍団については研究が手薄である。本稿は、華北戦線に参加したモンゴル軍団を対象とし、軍団長の家系を探り、その歴代の人物の歴史をたどった。探し得た家系はウリヤンカン部族スベエテイ家、ジャイラル部族ブジエク家、ナイマン部族マチャ家、タンクト部族チャガン家、マンクト部族ボロゴン家、フウシン部族タガチャル家、ジャライル部族チオルカン家の七家である。彼らが長となった軍団の軍府名は「蒙古軍都元帥府」「山東河北蒙古軍大都督府」「河南淮北蒙古軍都萬戸府」である。彼らの家系はトルコ・モンゴル系であるが、有力部族長の家ではない。多くはチングス・ハンとの個人的な繋がりを持つ者である。祖先に持つ。オゴデイ・カアン時代の金朝征服戦、対南宋戦を華北への駐屯の始まりとする。軍団長の職を世襲するとともに、行省・行台の高官を務め江南支配に関与した。彼らは、本拠地の所在・所領・官職・行動等からみて、王族や有力部族長の家系に次ぐ層を構成していたと考える。

史林 七五卷三号 一九九二年五月

## は し が き

一三世紀後半におけるモンケ、クビライの南宋遠征と元朝による南宋征服は東アジア史における大きな転換点であった。モンゴル帝国史、中国史どちらの立場からでもそれは明らかである。その重要性から、近年中国において宋元間の戦争史の專著が相次いで刊行されているほどである。<sup>①</sup> 筆者も、以前「クビライ政権の成立とスベエテイ家」『東洋史研究』第四八巻第一号、以下前稿と呼ぶ。を著わし、この時期に一貫して重要な役割を果たしたモンゴル人の一家系をとりあげて、クビラ

イ政権成立直後までの動向を探ったことがあった。

従来からの研究の蓄積によって、宋元間の戦争の経過については相当詳しいことまで明らかにされてきている。しかし、戦争を遂行した元のモンゴル軍団や漢人軍団、南宋の軍団が具体的にどのようなものであったかを明らかにする研究はまだ手薄と言わざるを得ない。元側の漢人軍団については、日本では以前から、位置付け等に問題はあるにせよ「漢人世侯」の名で研究が行なわれてきた。また、南宋末の軍団については研究が進展しつつある。しかしモンゴル軍団については、前稿発表当時と同様に研究がようやく緒についた段階である。元朝期の国家体制、また元の中国支配の実体を知るためにもモンゴル軍団の研究が不可欠と考える。

この現状に鑑み、南宋征服戦に参加したモンゴル軍団について考察を試みたい。南宋征服戦には華北から南下する戦線と陝西から四川を南下する戦線の二大方面があり、有名な襄陽包囲戦、バヤンの南征は前者に含まれる。両者は、戦線状況や軍団系統が異なる。そこで、本稿では前者での作戦に参加した華北のモンゴル軍団を対象とする。そして、まずモンゴル軍団長の家系を探り、その歴代の人物の歴史をたどることによって、家系の特徴、軍団長としての職名、軍府名、軍団の本拠地を明らかにすることを目的とする。それにより軍団長の家系の、国家体制への位置付け、中国支配への関わりについての見通しを立てることにより、華北のモンゴル軍団を解明する第一歩としたい。（本稿では、長たる将帥の軍府およびその麾下の軍を総体として軍団と呼ぶ。）

- ① 李天鳴『宋元戦史一〜四』（一九八八年、台北、食貨出版社、陳世松・匡裕徽・朱清澤・李鵬貴『宋元戦争史』（一九八八年、成都、四川省社会科学院出版社）、胡昭曦、鄒重華『宋蒙（元）關係研究』（一九八八年、成都、四川大学出版社）は全般にわたるもの。陳世松・喻亨仁・趙永康『宋元之際の瀘州』（一九八五年、重慶、重慶出版社）、陳世松『蒙古定蜀史稿』（一九八五年、成都、四川省社会科学院出版社）は四川方面に限ったものである。

- ② 南宋末の軍団については、小岩井弘光「南宋の生券、熟券制管見」『集刊東洋学』六二、一九八九年）、衣川強「劉整の叛乱」『劉子健博士頌寿紀念宋史研究論集』、一九八九年）が出た。モンゴル軍団については、松田孝一「河南淮北蒙古軍部万户府考」『東洋学報』六八—三・四、一九八七年）、史衛民「元代蒙古軍部万户府の建置及其作用」『甘肅民族研究』一九八八年三・四期、五一—六一頁）がある。松田論文は後に言及する。史論文は未見。ただし、一九八六年九月南京で

の国際元史学術討論会での発表要旨（『蒙古軍都万戸府的设置及其作用』、『国際元史学術討論会論文提要』六二―六三頁）による限り、四  
川、陝西方面も含めた各蒙古軍都万戸府の沿革、軍職名、軍団の規模

### 軍団長の家系の探索

や生活様式、出鎮、所管、軍団長が行省官を兼任したこと、軍団の腐敗と弱体化についての概述である。本稿は、華北の軍団長の家系の検討を主とし、史論文の対象事項の検討は次稿を期したい。

元代華北のモンゴル軍団長となった家系を総括的に述べた史料はない。そこで、諸史料中からモンゴル軍団長の家系を探索する作業が必要となる。探索するための手がかりとしたのは以下の三点である。1、「蒙古軍都元帥」「蒙古軍都万戸」「蒙古軍万戸」、またはこれらの名称を含む類似の名称のモンゴル軍団長の職務を帯びた人物を出した家系であること。2、その家を長とする軍団が華北に駐屯していたことが知られること。3、家系の歴史を少なくとも南宋征服戦までたどらうること。1の条件を満たす人物を諸史料から探し、文集、石刻書などに収められた碑誌伝状などの伝記史料から2、3の条件を満たすかどうかを判断した。

以上の作業から探し得たモンゴル軍団長の家系は以下の七家である。A・ウリヤンカン部族スベエテイ家、B・ジャライル部族ブジエク家、C・ナイマン部族マチャ家、D・タングト部族チャガン家、E・マングト部族ボロゴン家、F・フウシン部族タガチャル家、G・ジャライル部族チオルカン家。

以上挙げた七家は、当然ながら網羅的なものではない。それは、たとえ1の条件を満たしても、部族・家系をたどり得ない人物は入れていないためである。なお、臨安陥落後の南宋帝室追討の際、「蒙古漢軍都元帥」となり、例外的に「蒙古軍」を率いた漢人軍閥の張弘範、タングト人の旧西夏王家の李恒の家系は今回取り上げない。ただし、タングト人のチャガンは、若い時からチンギス・ハンの「第五子」として育ち、モンゴル人の身分を得た人物であるので、彼の家系は考察の対象とする。

次にこれらのモンゴル軍団長七家について、家系の性格・地位、歴代の軍団の長としての履歴、軍団長としての職名、

軍府名、本拠地について各々検討する。軍団長の職名、軍府名は、「」でかこみ、伝記史料などに記されるとおりに表記する。なお、F・タガチャル家とG・チョルカン家については、松田孝一氏の論考がある。<sup>③</sup>そこで本稿では、この二家については原史料によりつつも、略述するにとどめたい。

- ① 『集史』部族考では、タンクトもウリヤンカン、ジャライルなどと同様に部族(Gaun)の一つとして扱われているので、本稿でも「タンクト部族」と記す。(Rashid al-Din, *Faḍl Allāh Hamadāni, Jamī' al-Tawāriḥ*, MS. Istanbul, Topkapı Sarayı Müzesi, Kitüphanesi, Revan 1518, 28/4~5. [以下Rashid. *Ami-sare, Džacur' an-Taqurux: tomi, vact'bi, kpirnueckih tekst, Moscow, 1965, p. 321.* 以下Ami sare])

- ② 二人が「蒙古漢軍都元帥」となったのは、至元十五年(二七八)。

#### A・ウリヤンカン部族スベエテイ家<sup>①</sup>

『元朝秘史』にチンギス・ハンの「四狗」の一人としてその活躍が描かれるスベエテイ(①速不臺 *Sibe-tai*)を以て家の名とする。

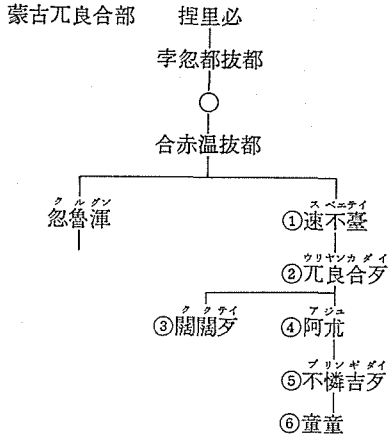
この家の属するウリヤンカン(Uriangqan)部族はモンゴル帝国成立以前からモンゴル部族に隸属した「譜代の隸臣(*otogci boyol*)」の部族である。<sup>③</sup>また、次に述べるように、スベエテイが形成した千戸集団がウリヤンカン部族のみから成るものではなかったことから、部族長の家系ではないと考える。なお、前稿で述べたように、この家系がトゥルイ家との繋がり強いことに注目しておきたい。

① スベエテイは当初は質子としてチンギス・ハンのケシクに入り、次いで「百夫長」となった。その後、戦功によって得た民によって千戸集団を形成し、「千戸長(*amir-e bezare*)」となった。ホラズムシャー国およびキプチャク草原遠征後に

張弘範は南宋滅亡後、十七年に没し、李恒は十九年に軍職を解かれて  
いるが、子孫はいずれもこの職を継いでいない。南宋帝室追討の際の  
臨時的な措置と考える。また漢人張弘範が「蒙古軍」を率いたことは  
例外的なことであった。張弘範の墓志に、「蒙古漢軍都元帥を拜す。  
漢人の蒙古軍を兼ね統ふるは國朝未だ此の比有らず。」と記すのは、  
それを物語る。「河北易縣發現元代張弘範墓志」『文物』一九八六年  
第二期。『元史』卷一五六張弘範伝なども同様のことを記す。

③ はしがき註②松田論文。

②家  
系図A：ウリヤンカン部族スベエテイ



は、征服したメルキット、ナイマン、ケレイト、キプチャク等の部族からなる軍団を率いたと考える。オゴデイ・カアンの金朝征服戦では、汴梁包囲の主将であった。⑤ 彼はその後バトゥのロシア・ヨーロッパ遠征の副総帥となるが、河南地方との関わりは保たれていたらしく、グユク・ハン時代にDのチャガンと対南宋前線に出征したことが知られる。⑦

②ウリヤンカダイ(兀良合歹 *Uragadai*)は、モンケ・カアンに幼時から仕え、そのケシクの将軍であった。雲南遠征に大功を立て「大元帥」の称号を得た。モンケ・カアン時代に、彼は③のククテイが継いだスベエテイの千戸とは別に千戸集団を形成したと考えられる。

もスベエテイの千戸はククチュ(*Kukin*)が継いだと伝える。前稿では保留したが、このククチュと、李璫の乱鎮圧直後の中統三年九月に軍中に没し、その後を④のアジュが継いだ「都元帥」の闊闕帯(ククテイ)は、史料不足ながら同一人物と考える。するとスベエテイの死後もその千戸集団は河南に駐屯し続けていたと考えられる。

④アジュ(阿朮 *Aju*)は父ウリヤンカダイと雲南に遠征した時は何の地位にもついていなかった。クビライ政権成立後、そのケシクの将軍として対南宋前線に派遣された。③ククテイの死後、「征南都元帥」を継ぎ、汴梁を根拠地に「南辺の蒙古漢軍」を率いることとなった。至元九年(一二七二)襄陽包囲戦の途中で、蒙古軍はアジュ、漢軍は劉整が分担して率いることとなり、アジュは「蒙古都元帥」と称された。同年九月に同平章事、襄陽陥落後の十年四月に「荆湖樞密院の事を行」した。至元十一年に「荆湖行省」の平章政事、淮東の揚州包囲戦最中の十二年に中書左丞相に昇進したが、「都元帥」の職は保ち続けた。淮東を平定し入覲した翌年十四年には「鋭軍万人を選び、闕に赴く」ことを命ぜられ、そして諸

王シリギの乱平定に向かう。さらに対カイドゥ戦線に赴き、至元十七年（一二八〇）末に天山北麓のビシュバリクで病没した。<sup>⑧</sup>

⑤プリンギダイ（不憐吉歹 Buringtai）の経歴は至元二十年代に江淮行省平章政事として、浙江・福建方面の反乱を鎮定したことから知られる。クビライ時代末から成宗テムルの初には、江淮行枢密院同知枢密院事であった。テムルの末年には河南行省丞相であり、後の仁宗アユルバルワダとその母ダギのクーデターに協力し、その功績で仁宗時代に「河南王」に封ぜられた。天曆二年（一三二九）以前に没した。この様に彼の経歴を追っても「都元帥」など軍団長の職についていたことを示すものが無い。これについては二つの可能性がある。一つはアジュと同様に「都元帥」等の職は保ちながら、他の職を兼任し、兼任した職の方が高位であるので、史料ではそちらのみを記した。もう一つは、彼以外の人物が「蒙古（軍）都元帥」職を継いだ。屠寄は『蒙古児史記』巻九一阿朮伝でプリンギダイがアジュの軍を継いだとし、さらにプリンギダイの子として⑥童童を挙げるが根拠は未詳である。<sup>⑩</sup>

軍府名についての考察に移る。アジュが軍団を率いることになった中統三年には、軍府は彼の名を付して「阿朮元帥府」と呼ばれていた。<sup>⑪</sup> 当時彼は都元帥であるからそれを元帥と略称し、また都元帥が他にもいたため彼の名を付したものと考える。軍府名が、職名に「府」を付したものであるとすると、アジュについては「征南都元帥府」「蒙古漢軍都元帥府」「蒙古（軍）都元帥府」が想定されるが、史料上確認できるのは「蒙古軍都元帥府」である。この軍府は、至元二十一年に他の華北の軍府と合併して「蒙古都万戸府」と改称されるが、『元史』百官志には「蒙古軍都元帥府」の記載があるので、後に分かれて旧称に戻ったことがわかる。<sup>⑫</sup> 以上から元朝期にこの家が長となった軍府名は「蒙古軍都元帥府」と考える。

アジュが汴梁を本拠地としたこと、この家と汴梁の関係はスベエテイの汴梁包圍戦にあると考えられることは前稿で述べた。プリンギダイの代になっても汴梁を本拠地としていたと考える。それは、成宗テムル時代に祖先三代の廟を汴梁に建てたこと、プリンギダイが汴梁を治所とする河南行省丞相となり、河南王の封号を受けていることによる。なお、アジ

ユ宛てに、「蒙古軍」が「民田」を牧地にすることを禁ずる命令が出され、またアジュに馬や馬を購入するための鈔が支給されている事から、軍団は汴梁郊外に駐屯したと考える。なお、前稿で述べた汴梁・トウラ河畔・官山以外で、この家系に係っている華北の地が三箇所あるが、いずれもこの家系自身が駐屯する本拠地とは考えられない。<sup>15)</sup>

① 以下のスベエテイ家の記述は、系図を含め、主に王揮「大元光祿大夫平章政事兀良氏先廟碑銘」(『秋朔先生大全文集』巻五〇)、以下「先廟碑銘」、『元史』巻一二二、速不台伝、兀良合台伝、巻一二二雪不台伝、巻一二八阿朮伝に依る。

② 以下A/Gの系図は男系のみで婚姻関係は省く。人名に付した番号は記述の便のためであり、承襲順を示すものでない。軍団長の職の承襲は、「結び」の表2「華北のモンゴル軍団長の軍職承襲表」に記す。  
③ 村上正二『モンゴル秘史1』(一九七〇年、平凡社東洋文庫)二二九頁。「譜代の黠臣」の性格については、亦鄰真「関于十一十二世紀的李幹勸」(『元史論叢』第三輯、一九八六年)参照。なお、『集史』部族考ウリヤンカン部族の項には混乱がある。別の部族として立項されている「森のウリヤンカン部族」の千戸長ウダジが *otegin boyol* であるとの記事が紛れ込んでいるのである。この混乱の理由は未詳。(Rashid. 31b/27~32a/5, Arunara, pp. 381-383)

④ 『元朝秘史』巻九、第二二節。「シヘン、スベエテイの二人は己が獲ち得たる、己が集め置きたる〔民草ども〕によりて、千〔戸〕の長となりて、統べおるべし、と宣ひ、」訳文は村上正二『モンゴル秘史3』(一九七六年、平凡社東洋文庫、三七頁)による。本田實信「チングス・ハンの軍制と部族制」(『モンゴル時代史研究』、東京大学出版会、一九九一年)四九頁参照。

⑤ 「先廟碑銘」(3b~3c、四部叢刊本)「使を遣わして、奏して減里吉乃蛮・怯烈・杭斤・欽察等の千戸を以て別に一軍を為すを乞ふ。」『元

史』巻一二二速不台伝にも同意の記事がある。

⑥ 『元史』巻二、太宗本紀、四年(一二三三)三月、五年夏四月。王國維『聖武親征錄校注』壬辰三月、癸巳春正月。陳樞『通鑑統編』巻二二、紹定五年正月、十二月、六年正月の各記事に依る。

⑦ 前稿の註⑩参照。

⑧ アジュの死には相矛盾する二つの記録がある。一つは、『元史』巻一一、世祖本紀八、至元十七年十二月末の「左丞相阿朮、西辺を巡歴し、別十八里(ビシュバリク)に至りて疾を以て卒す。」である。もう一つは、「先廟碑銘」、それに基づく『國朝名臣事略』巻二「丞相河南武定王、及び『元史』巻一二八、阿朮伝である。それらでは、「(至元)二十三年、命を奉じて北のかた叛王昔刺木等を伐つ。明年凱旋し、繼いで西征し、哈刺霍州(カラコジ)に至り、疾を以て薨す。」(「先廟碑銘」と、没年、地とも本紀と異なる。これら二種の記録を合理的に解釈したのは屠寄の『蒙兀児史記』巻八、忽必烈可汗本紀の該當記事の註である。彼は、元史列伝の二十三年の紀年を十三年の誤りとし、「昔刺木」を「撒里蛮(サルベン)」の別表記と考え、没地も元史本紀に依るべきとしている。「昔刺木」の「木」はむしろ誤記の可能性が高いと考えるが、本紀に依るべしとする屠寄の説には従いたい。シリギの乱には専論もあり(村岡倫「シリギの乱」、『東洋史苑』二四・二五、一九八五年)、当時のモンゴリア、対カイドゥ前線についての考究を進めたい。

⑨ 以下のプリンギダイの経歴は、『元史』巻一二二、至元二十年十月庚

子；卷一五、二十六年閏十月丙申；卷一六、二十七年十一月戊申；卷一七、三十年二月丙申；卷一八、三十一年九月庚申；卷二五、延祐元年六月戊子；卷九九、兵志二、鎮戍、至元二十七年十一月の各条及び卷一三一、襄加歹伝、忙兀台伝、卷一三七、察罕伝、卷一七八王約伝に依る。陶宗儀『南村輟耕録』卷一五「河南王」は、プリンギダイの寛容と權勢を物語る挿話である。また、『宋元学案』・『宋元学案補遺』卷九〇、魯齋学案では、彼が許衡から教えを受けたことを記すが典拠は未詳。

⑩ 『蒙兀児史記』卷九一阿朮伝、童童が中奉大夫、集賢待講學士であったとのみ記す。この名の人物を『元史』に求めると三箇所に出てくる（卷三〇、泰定四年八月壬辰、卷三五、至順二年三月癸巳、九月癸巳）。泰定四年（一二二七）に河南行省平章政事として、文宗至順二年（一二三一）には二月に江浙行省平章政事として、九月に皇帝の肖像を納める寺院とその財産管理をつかさどる太禧宗禋使としてである。これら全てが同一人物でアジュの子だと断定するだけの材料はない。しかし、河南、江浙行省ともプリンギダイが高官を務めたこと、かつ泰定の記事で童童が「世々河南に官たり」とされていることから、泰定と至順二年二月の童童はプリンギダイの子である可能性がある。三箇所とも御史に彈劾された記事であり、至順二年二月には実際に免官されているので、これらが同一人物とすれば、童童は当時朝廷との間に摩擦があったと言える。いずれにせよ、童童が軍団長であったとする記録は見出だせない。なお、スベエテイの兄クルグン（忽魯渾）の系統にもアジュの「都元帥」の職を継いだ者はいない（黃滔『江浙行中書省平章政事贈太傅安慶武襄王神道碑』、『金華黃先生文集』卷二四、クルグンの孫イエスデル（テムル）の神道碑）。

⑪ 『永樂大典』卷一九四一六、站赤、所収の經世大典、中統三年四月二二日ママの条。これは、河南、四川の前線の都元帥、万戸をはじめ

とする「軍官」たちからバイザを回収することを命じたクビライの聖旨である。この記事の次に載る二十日の聖旨は、各路の宣慰司に対する同種の命令である。これら二つの記事が、『元史』卷五、世祖本紀二、中統三年十二月壬申（二十日）の「使を遣わして諸路の軍民官の海背牌及び駅券を收轉せしむ。」に一致することから、十二日が十二月の誤記で、同年九月にアジュが都元帥になったとの記事に矛盾しないことが分かる。

⑫ 『元史』卷一三、至元二十一年六月庚申、「蒙古都元帥府を改めて蒙古都万戸府と為す。」卷八六、百官志一、河南淮北蒙古軍都万戸府、「至元二十四年、四万戸與魯赤を以て、改めて蒙古軍都万戸府と為す。」同、山東河北蒙古軍大都督府、「至元二十一年、統軍司元帥府を罷め、蒙古軍都万戸府を立つ。」卷九一、百官志七、都元帥府、「蒙古軍」。

⑬ 「先廟碑銘」の始めに、成宗の元貞元年の追贈追封と廟建設の経緯が述べられている。

⑭ 『元史』卷五、中統四月正月乙酉、七月壬寅；卷六、至元三年二月乙酉；『通制条格』卷一六、田令、軍馬擾民（中統四年正月）の各条はアジュ麾下の蒙古軍が民田を牧地にするのを禁じたもの。『元史』卷五、中統四年八月辛亥；卷六、至元二年六月辛未、『大元馬政記』和買馬、中統四年八月四日、至元六年二月二十二日の各条は、アジュ麾下の軍に馬または馬購入のための鈔（馬餉鈔）を支給する記事である。

⑮ その第一は山東の開州である。ここにはかつて「阿朮律大官人祠堂」があったことが『正徳』大名府志』卷四、祠記志、廟貌、開州に見える（この「阿朮律（アジュル）大官人」が、後に河南王に（追）封されたとの記載から、スベエテイ家のアジュであることが判明する）。それによるとかつてアジュがこの地を通過した際、反乱が起こった。鎮圧後の処刑の時、アジュが加担者とそうでない者の区別を厳密にし



たため、三分の二が助かった。また、河北に駐屯していた軍団の横暴を取り締まったので、民は恩に感じて祠堂を建てたという。アジュ自身は開州に駐屯したのではないが、この地の軍団を指揮下に置いていたことが分かる。開州に駐屯していた「蒙古軍」は、トルコ系のカルルク部族である(『元史』巻一九〇、伯顔伝、『正徳』大名府志)巻一〇、伯顔宗遺伝)。また錢大昕が『元統元年進士録』を根拠として挙げる託本も、この地にいたカルルク部族である。なお、「阿朮律大官人祠堂」の記事の存在は池内功「元朝における蒙漢通婚とその背景」(『アジア諸民族における社会と文化』、一九八四年)により知った。第二は江蘇の泰興県である。南宋の兩淮地方平定の功により、この地の二千戸を与えられた。その後の関係については分からない。『元史』巻九五、食貨志三、歲賜では、スベエテイ、ウリヤンカダイどちらの

## B・ジャライル部族ブジエク家<sup>①</sup>

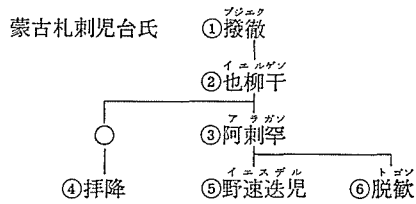
この家系で知り得る最初の人物ブジエク(①撥徹 *Büçür*)により家名とした。この家はジャライル部族出身ではあるが、有名なムカリのジャライル国王家ではなく、またジャライルのどの系統であるかも分からない。ブジエクがチンギス・ハンのケシクでコルチやバウルチであったためか、『秘史』の八八功臣、『集史』の「チンギス・ハンの軍隊」とも千戸長として彼の名は見えない。

①ブジエクは今も述べたようにチンギス・ハンのケシクでコルチ、バウルチをつとめ、オゴデイ時代に隴北・陝西での金との戦いで戦死した。<sup>②</sup>

②イェルゲン(也里干 *Yerügan*)は、父のコルチ、バウルチの職を継いだ。オゴデイの命で、トゥルイの庶子ジュリケ(岳里吉 *Jurike*)のケシクの長(「番衛之長」)、「衛士長」となったという。<sup>③</sup>この家系がトゥルイ家に所属していたことが分かる。

項にもこの地の記載が無い。第三は現在の南京である。元末の地方志『至正金陵新志』巻一「集慶路城之図」に付された「集慶路治図攷」に「河南王宅(旧総領所)」と見える。河南王とは⑥プリンギダイであると考えられる。地図は不鮮明でどこにあたるか分からないが、南宋時代の旧総領所を転用したことを手がかりにして南宋末の『景定建康志』巻五の府城之図を見ると総領所は城内の中心部にある。これは、彼が建康を治所とする江淮行省の平章政事、江淮行樞密院の同知樞密院事であった時に居住したのであろう。江南においてこれらの官職に就いた場合は、軍団を伴わず都市居住者となっていたと考える。なお、至正年間の地誌にこの記事があるのは、元末に至るまでこの家系の居宅が維持されていたことを示すと考える。

系図B：ジャライル部族ブジュク家



金滅亡後の一二三五年、おそらくジュリケの夭折後、オゴデイの子クチュ、クトクの南宋遠征に従い、その功で「万户」となる。クチュの死後、ベルグテイ家のコウンブカの次にDのタングト部族のチャガンが総帥となった。イェルゲンはその副将となり「天下馬歩禁軍都元帥」として対南宋前線に駐屯した「諸翼蒙古漢軍馬」を率いたという。

憲宗モンケ時代もチャガンとイェルゲンを将とする「蒙古漢軍」が前線の両淮攻略のために駐屯する体制が続いた。④チャガンの死後はイェルゲンが彼の地位を継いで、「諸翼軍馬都元帥」となった。そして、モンケ時代末の一二五八年、淮東の要地揚州の攻略戦で戦死した。

③アラガン(阿刺罕 Aragun)は、父を継いで「諸翼軍馬都元帥」となりその軍を統率した。クビライの南宋遠征、対アラクブケ戦、李璣の乱鎮庄に参加し、「都元帥」の地位を保った。都元帥アジュの麾下に入ったため、至元四年(一二六七)に「上万戸」に格下げされたが、率いる

軍はやはり「蒙古軍馬軍」「蒙古漢軍」であった。アジュの襄陽包囲戦、バヤン・アジュの南宋遠征に従い、至元十二年五月バヤンがクビライに会うため戦線を離れた際、代わって建康に駐屯し行中書省の参知政事となった。さらに左丞、右丞と進み、また江東宣慰使、淮東宣慰使としてその地の平定にあたった。最後には至元十八年、第二次日本遠征の総帥日本行省左丞相となったが慶元(明州)で出帆直前に病死した。⑤これらの間も「上万戸」の職は保ち続けていたと考える。

④降参。アラガンの没時、その子イェスデルが幼かったため、イェスデルの族兄の降参が「万户」を継ぎ軍団を率いた。軍功により江淮行枢密院の僉書枢密院事、江淮行省右丞、福建行省右丞、河南行省平章政事を歴任するが、やはり「万户」の職を有しその軍団を保ち続けた。

⑤イェスデル(野速迭児 Yesideji)。成宗テムルの元貞元年(一二九五)、大カアンの代替りに際して、彼が降参に代わり「左手蒙古軍万户」を継いだ。武宗、仁宗、英宗、泰定帝時代もその職を保った。泰定帝死後の「天曆の内乱」で、彼は河南

行省平章政事のメルキット部族のバヤンに協力し文宗トク・テムル側につき、その勝利に貢献した。その功により「山東河北蒙古軍都万戸」に昇進し、さらにその山東河北蒙古軍万戸府が「山東河北蒙古軍大都督府」と改称、従二品に格上げされて、その長の「大都督」の一人となった。順帝の後至元六年十二月以前に没した。

⑥ トロン(脱歡 Toyon)は、河南、江西、湖広、江浙の各行省、江南、陝西の各行御史台の高官を歴任した。兄イエスデルの死後も「万戸」などの軍団長の職を継いだことは伝記史料には記されていない。兼任を史料が記していない可能性もあるが、むしろこの家系の別の人物が軍団長の職を継いでいたものと考ええる。

軍府名について考える。①ブジエク、②イエルゲンについては未詳。③アラガンが万戸として率いていた当時、軍府は彼の名を付して「阿刺罕万戸府」と呼ばれていた。⑤イエスデルの時には「左手万戸府」と称された。この「左手万戸府」は、天曆の内乱後、彼がその長の人となった「山東河北蒙古軍大都督府」を構成する六万戸府の一つであった。したがって、この家は「山東河北蒙古軍大都督府」の長であると同時に、「左手万戸府」の長でもあったと考ええる。

この家の本拠地と考えられるのは曹州(済陰県)である。それは、至元十八年に没した③アラガンが「曹州済陰県郭村之原」に葬られていることを根拠とする。ここを本拠地としたのは、②イエルゲンが従軍したオゴデイ時代のクチュの南征以降の時点であろう。というのは、それ以前にこの家が華北に駐屯したと考えられないためである。①ブジエクの時代はチンギス・ハンのケシクに属して、その近傍にいたと考えられる。②イエルゲンがトゥルイの庶子ジュリケのケシクの長であった時にどこにいたかは分からない。ただ、夭折したジュリケが華北に派遣された可能性は少ないから、トゥルイの相続した「中央ウルス」のどこかと考える。なお曹州のほかはこの家に関わる地が二箇所あるがどちらも本拠地とは考えられない。

① 以下のブジエク家についての記述は、系図も含め、主に虞集「曹南王勳德碑」(『道園学古録』卷二四、『国朝文類』卷二五)、許有壬「勅

賜推誠宣力定遠佐運功臣太師開府儀同三司上柱国曹南忠宣王碑銘」、「有元功臣曹南忠宣王祠堂碑」(各々『至正集』卷四五、四九)、『元

史』巻一二九、阿剌罕伝に依る。補注①

② 那珂通世は『秘史』に見えるオゴデイ・カアンのケンクの侍衛の長の一人「着克」、スベエテイとともにホラズムシャー圍遠征に向かった「不着克」、さらに太祖八年の金圍遠征で左翼軍を構成した「聖武親征録」の「薄察」、『元史』太祖本紀、趙秉伝の「八札」まですべてこのフジクに比定する（『成吉思汗実録統編』、『那珂通世遺書』一九一五年。六五、六六、七〇頁）。もしこれらが同一人物であれば、スベエテイとの際がりが廻り得ることになる。しかし、伝記史料にはなんらの記載もなく認めがたい。

③ 本節註①の「祠堂碑」を除く各史料。銭大昕『二十二史考異』巻九五、屠寄『蒙兀児史記』巻九三、那珂通世（前掲書、六六頁）は、「岳里吉」をオゴデイの子「月良」に比定しているが誤りて、トゥルイの第二子で庶子のジュリケにあてるべきと考える。『集史』トゥルイ・ハン紀には、「トゥルイ・ハンの第二子、ジュリケ（Jürike, GWRKYKH）（空欄）ハトンから生まれた。若くして亡くなり、子女は無かった。」と記す（Rashid, 176a/5-7, E. Blochet, *Diarii el-Tewarikhi* tome II, Leiden, London, 1911, p. 212.）『通鑑統編』は巻二一、淳祐五年十月のトゥルイの死の記事に彼の妻子を注記する。憲宗モンケに次いで「次を朮児哥と曰う」とある。なお、『元史』宗室世系表では第二子と第三子の順が入れ替わり、「次三、其の名を失す。」とあるのがジュリケに当たろう。『南村輟耕録』巻一、大元宗室世系にも元史と同様の記述があるが、誤って彼の子の位置に、モンケの子バルトゥ（辯都）や、クビライの子ドルジ（朶兒只）、チンキム（裕宗皇帝）が続けられている（四部叢刊本）。

④ 『元史』巻三、憲宗本紀、元年（一二五一）六月の「改更庶政」の記事。「茶寒、葉子干を以て兩淮等処の蒙古漢軍を統べしむ。」「通鑑統編」は七月にこの記事を繋げる（巻二二、淳祐十一年）。

⑤ 『元史』巻一二九、阿剌罕伝「（至元）四年春、上万戸に改められ、都元帥阿朮に従い宋を伐つ」。

⑥ バリオが、マルコ・ポーロ『世界の記述』の日本遠征の將軍二人のうち、ABACANをこのアラガンと確認しているのは正しいと考える。しかし、彼がさらにアラガンと父のイェルゲンを、アリクブケの子メリクテムルのアミールのアラカ（Alqa）と父シルケ・バハードル（JYLKHN BHADR）に誤りてゐる（P. Pelliot, *Notes on Marco Polo I*, Paris, 1959, p. 1）。これらの父子はハンコタン部族に属する（Rashid, 214a/24-25）。ポイルが彼らをかタキン部族とすゝる誤り（J. A. Boyle, *The Successors of Genghis Khan*, New York, 1971, p. 314.）。

⑦ 『元史』巻八六、百官志二、山東河北蒙古軍大都督府。および本節註④の「曹南王勲德碑」。

⑧ 『元史』巻一三四に伝のあるバヤウト部族の和尙は、中統三年の李璣鎮圧戦の功で「阿剌罕万戸府経歴」となった。

⑨ 『元史』巻八六、百官志二、山東河北蒙古軍大都督府。

⑩ 本節註④の「曹南忠宣王神道碑」。

⑪ 第一は河北の保定である。『元史』巻九五、食貨志三、歲賜、勲臣に「阿剌罕万戸。五戸糸、壬子年、元查保定一戸。」とある。阿剌罕万戸は③アラガンと考えられるが、壬子年は憲宗モンケの二年（一二五二）で②イェルゲンの代である。有名なアラガンで家を代表させたものか。保定とこの家の関わりはこの記事以外に確認できない。また、与えられた五戸糸戸はわずか一戸である。五戸糸戸を有する勲臣の家という家格を認める意味を持つものであって、この地に駐屯して本拠地としたのではないと考える。第二は建康（集慶）である。元末の至正元年この都市の中心部、文宗の旧邸を改めた大龍翔集慶寺の西隣にアラガンの祠が建設された（本節註①の「祠堂碑」及び『至正』金陵

「新志」卷一、曹南王祠堂図とそれに付された直訳体命令文の「抄白」。  
その経緯は次のとおりである。後至元六年に順帝トゴン・テムルは当時権力を握っていたメルキッド部族のバヤンを追放した。このクーデタに、中書平章政事であった①トゴンは協力した。その功により彼は再び「江南行御史台御史大夫」に任じられることになった。彼は、父アラガンがバアリン部族のバヤン、A. スベエテイ家のアジュとともに南宋征服に大功を立てたことを理由に、赴任地の集慶に祠堂を建てて顕彰することを要求し、認められた。建康(集慶)は、かつて南宋遠征の途中バヤンが召喚され、アジュが揚州攻略に苦戦していた際、ア

### C・ナイマン部族マチャ家<sup>①</sup>

チンギス・ハンに投降し、モンゴル帝国(元朝)でのこの家の繁栄のもととなった①マチャ(麻察、馬察 *Mača*)の名によってマチャ家と名付ける。

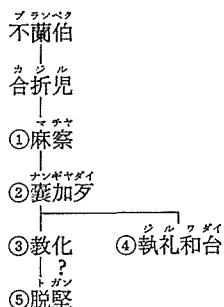
投降以前、この家はトルコ系のナイマン *Naiman* 国の重臣であった。マチャの祖父ブラン・ベク(不蘭伯 *Bulan-beg*)は、臣下の筆頭であり、父のカジル(合折児 *Qajir*)は親衛軍を率い、かつ国政にも関与して最後は「太師」となったという。この家がナイマン部族の二つのウルス(国)のどちらに仕えていたのかは分からない。チンギス・ハンのナイマン征服に際して、マチャが投降した。

次に軍団長としての履歴を中心にこの家歴代の歴史を見よう。投降した後のチンギス・ハン時代の状況は分からない。オゴデイ・カアンは、マチャにチャラ(察刺)なる人物とともに「蒙古漢軍を総管」させた。マチャはクビライの南宋遠征、対アリクブケ戦に従い、李璫の乱鎮圧には諸王カビチュおよびスベエテイ家の都元帥ククテイに従った。この後まもなく没したらしい。

ラガンが行中書省参知政事として駐屯した地でもある。しかし、この地に「山東河北蒙古大都督府」または「左手万户府」の軍団が駐屯したとは考えられない。ひとつには、幾つもの万户府、千戸所から成る集団が、「江南行御史台御史大夫」の任期中のみ異動したとは考えにくいのである。もうひとつは、トゴンの軍団長の襲任が確認できないためである。『(至正)金陵新志』卷一「集慶路城之図」は都市中心部東よりに「行御史台」を示す。トゴンは当時ここに居住したと考える。

系図C：ナイマン部族マチャ家

乃蛮氏



②ナンギャダイ(囊加帯 Nangiyadai)こそ、多大なる戦績により昇進し、この家の地位を高めた人物と言える。

世祖クビライ時代の彼の履歴は次のとおりである。彼は若くから父マチャとともに従軍したが、父の死後、「都元帥府の経歴」となった。この後、襄陽攻撃にアジュにしたがって参加していることから都元帥アジュの麾下にいたことがわかる。襄陽戦の功で「漢軍千戸」となり、バヤンの南宋遠征に従う。そして南宋朝廷への使者となり賈似道との交渉にあたり、さらに臨安の無血開城に活躍する。バヤンの命により宋の玉璽をクビライに齎らし、帰途には南宋の君臣をクビライのもとに送れとの密命を伝えた。この際に安撫司ダルガチとなり、ブジエク家のアラカン、董文炳とともに浙江・福建平定を担当した。至元十五年以前に「蒙古軍副都万戸」、江東宣慰使となり、さらに江東按察使に昇進した。ふたたび江東宣慰使となった際も以前どおり「万戸」であったという。至元十八年に「都元帥」として第二次日本遠征軍を率いたが、未だ至らずして還った」という。この「都元帥」は日本遠征に伴う一時的なものであったらしい。日本遠征失敗後、「もと管したる出役軍」とボロミル(孛羅迷児)なる人物の軍団を合体して、「万戸」として建康に駐屯した。その後一時雲南行省平章政事として金齒、緬国の征討にむかうが病のため召喚され、南京等路宣慰使、河南道宣慰使を歴任する。至元末年には父の職を襲って、「蒙古都万戸」となっていたこと、「探馬赤軍」が彼の管轄下にいたことが確認できる。

成宗テムルから仁宗アユルバルワダ時代まで、ナンギャダイは巧みに政争をくぐりぬけ自らと家の地位を保った。成宗テムル時代、後の武宗カイシャンに従ってアルタイ方面でカイドゥ軍と対峙戦闘した。さらにテムルの没後、彼は懐州に配流されていたアユルバルワダと母のダギ太后に、スベエテイ家のブリンギダイ等とともに協力し、成宗のブルガン皇后と安西王アーナンドに対するクーデターの成功に寄与した。その際、チャガタイ家の諸王トラの協力を取り付けるための使者にもなったのである。

カアンとなったカイシャンと皇太子アウルバルワダの間で、両者に深い関係をもつナンギャダイの立場は微妙であったろう。武宗朝に同知樞密院事、ついでそれに加え「蘄県万戸府達魯花赤」となる。仁宗即位後、彼が河南（蘄県のことを指すか）に居住することから、河南江北行省平章政事を授かり、そしてその生涯を終える。これらの時期もクビライ時代の「蒙古軍都万戸」の職を保ち続けたと考えるが、史料の表面には出てこない。

③教化は「山東河北蒙古軍副都万戸」となった事以外は不明である。これは、父ナンギャダイから受け継いだものである。父が「蒙古軍都万戸」にまでなったのに対し、彼が「副都万戸」なのは、華北のモンゴル軍団の組織に変更があったためと考える。

④シルワダイ（執礼和台；只里瓦台 Jiwadai）は、皇帝の肖像を納める「影堂」を持つ寺院とその財産の管理を行なう殊祥院使となった。仁宗延祐四年（一二二七）には燕南河北道肅政廉訪使であった。江浙行省平章政事を経て、父ナンギャダイと同じく河南江北行省平章政事となった。軍団長としての職に就いたことは確認できない。

⑤トガン（脱堅 Togan）はナンギャダイの孫であるが、教化、シルワダイまたはその兄弟のうち誰の子か分からない。「山東河北軍大都督」を継いだという。これは「山東河北蒙古軍大都督府」の長「大都督」のことである。先にB・ブジエク家の所でも述べたように、「山東河北蒙古軍都万戸府（正三品）」は天曆の乱の文宗トク・テムルの勝利に貢献したために「山東河北蒙古軍大都督府（従二品）」と改称し格上げされた。従って、トガンは教化の地位を継いだことが分かる。また、『元史』本紀などには表れていないが、この家が天曆の乱で活躍した可能性があるといえる。

この家が受け継いだ職名は、ナンギャダイの「蒙古軍都万戸」、教化の「山東河北蒙古軍副都万戸」、トガンの「山東河北蒙古軍大都督」と移り変わる。これは軍団の組織の変化によるものである。軍府名は各々に「府」を付したものであった。

この家の本拠地を決定するのは難しい。その可能性のある地は蘄県、開州、濮州の三箇所である。以下各々検討する。

第一の蘄県は、ナンギャダイが武宗時代に「蘄県万戸府達魯花赤」となっていることを根拠とする。この時期彼がそこにいたことは確かであろう。しかし南宋滅亡以前、蘄県付近の兩淮地方は戦争の最前線であり、安定した本拠地には成り得ない。当時、ここより北に本拠地があったはずである。

第二の開州の根拠は、ナンギャダイの追封号「浚都王」である。『浚』は春秋時代衛国の邑の名、開州濮陽県の南にあたるという。先に述べたように、ここにはアジュ麾下の軍団の駐屯が確認でき、アジュの「都元帥府経歴」となったナンギャダイの本拠地であった可能性がある。ただ、カルルク部族の軍団の駐屯地であったことも確認され、それとの関係ははっきりしない。

第三の濮州の根拠は、文宗の天曆二年(一二三九)十一月「山東河北蒙古軍大都督」がこの地に遷されたことである。<sup>⑦</sup> トガンはこの軍団の長「山東河北蒙古軍大都督」であった。ところで、この軍団の長の定員は三名であった。<sup>⑧</sup> トガン以外にこの職に就いた人物は、先に述べたブジュク家のイエスデルであり、その本拠地は曹州である。残りのもう一名の大都督の家の本拠地である可能性もある。だが、その家は山東の泰安州に本拠地を持つE. ボロガン家であると考える。したがって、マチャ以来のこの家の本拠地としていちばん可能性が高いのは濮州であると考える。

① マチャ家に関する記述は、系図も含め、主に『元史』卷一三一、獲加歹伝、趙孟頫「中奉大夫殊祥院使執札和台封贈三代制」に依る。

② 『大元聖政國朝典章』卷三四、兵部一軍役、探馬赤軍、探馬赤軍關端赤代役。至元二十八年に「蒙古都万戸獲加歹」が、探馬赤軍人を取り締まる聖旨をクビライに直接請い、逆にクビライから自分たちのことは自分たちで厳しく取り締まるようたしなめられたことなどを記す。探馬赤軍人は以前アジュが管轄した頃と違って、自らの代わりに馬曳ぎ(關端赤)を軍に行かせていた。アジュの麾下に探馬赤軍がいたこと、ナンギャダイの「蒙古都万戸」の地位が、クビライに「面奏」

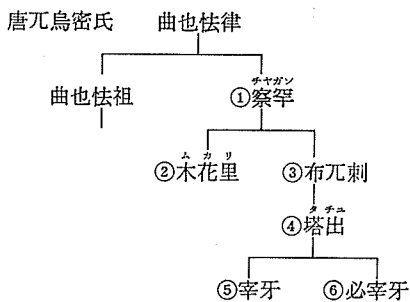
できるほど高かったことも分かる。

③ カインシャンの対カイドウ戦出征については、松田孝一「カインシャンの西北モンゴリア出鎮」(『東方学』六四、一九八二年)参照。『集史』クビライ・カアン紀の、帝國辺境の状況についての記事に見える「ナンギャダイ」との関係については、松田論文八一頁および杉山正明「西曆一三二四年前後大元ウルス西境をめぐる小札記」(『西南アジア研究』二七、一九八七年)四二頁参照。

④ 『元史』卷一三一、獲加歹伝、および卷一三七、察罕伝。諸王トラ(禿剌)については、杉山正明「ふたつのチャガタイ家」(『明清時代



系図D：タングト部族チャガン家



### D・タングト部族チャガン家<sup>①</sup>

チンギス・ハン自身の千戸の第一百戸長として名高い①チャガン(察罕 Čaqaan)をもって家の名とする。この家はタングト Tangut 部族の烏密氏出身である。父の曲也怯律は西夏国の臣であり、西夏滅亡時は甘州の守将であったが、降伏の際の内紛で殺された。滅亡後、西夏国民は、遠征に参加した諸王らに分与されたが、チャガンはチンギス・ハン自身に分属した。彼は若いころからチンギス・ハンに目をかけられて育てられ、「第五子」と呼ばれた。そして、モンゴル人としての待遇を与えられ、チンギス・ハン家の姻族として名高いオンギラト部族の女を娶った。以上から、この家はタングト部族出身といっても、部族としての勢力ではなく、チンギス・ハンとの個人的な結びつきを背景に軍団長となったものと考ええる。

①チャガンは、長じて後チンギス・ハン自身の千戸の第一百戸長としてその千戸全

の政治と社会』、一九八三年）六七二頁参照。  
 ⑤ 殊祥院は、『元史』巻七五、祭祀志四、神御殿、および巻八七、百官志三、太禮宗禪院の各項に、殊祥院が太禮宗禪院の前身の一つであることが記されているため、殊祥院が判明する。歴代帝后の肖像を納める「影堂(神御殿)」を持つ大部の大寺は、百官志に載る属司を見れば分かるように、多くの寺産を各地に有していた。したがって、殊祥院使の地位も重要なものと考える。ジルワダイが燕南河北道肅政廉訪使であったとするのは、沈澗『常山貞石志』巻一九、「祝延聖主本命長生碑」、錢大昕『潛研堂金石文跋尾』巻一九、「祝延聖主本命長生

碑」、藤島建樹「元朝治下華北の寺院」(『大谷大学史学論究』二、一九八八年)一〇二〜一〇三頁である。真定の著名な龍興寺の碑文に載る「執礼和合」をマチャ家のナンギヤダイとする。今、これに従う。彼が江浙行省平章政事として杭州に入城したのは、順帝至正元年である(楊瑀『山居新話』、陶宗儀『南村輟耕錄』巻九、火災)。  
 ⑥ A. スベエテイ家の註<sup>⑥</sup>参照。  
 ⑦ 『元史』巻三三、文宗本紀二、天曆二年十一月辛巳の条。  
 ⑧ B. ブジュク家の註<sup>⑦</sup>参照。

体を管轄した。『元史』の彼の伝に「御帳前首千戸」となったとするのは、この事をさす。この千戸はチンギス・ハンの没後トゥルイに与えられた。チャガンはオゴデイ・カアンの命でその職をおなじタングト部族出身のエケ・ニウリンに譲り、ヒタイの前線軍司令官となった。『集史』部族志タングト部族の項に次のようにある。<sup>②</sup>

オゴデイ・カアンの時代に、「カアンは、」このウチャガン・ノヤンをヒタイの國境にいたすべての軍隊の長に任命された。それとともにヒタイの統治権が付加された。その境域に駐留する諸王やアミールたちに到るまですべて彼の指令のもとにあった。

この記事を『元史』など漢文史料と比較検討し、以下のように考える。オゴデイ・カアンは、金滅亡後の一二三五年のクリルタイで帝国の東西四方面に遠征軍を派遣することを決定した。そのうち南宋攻略は第二子クチュを総帥としたが、実際の指揮はチャガンが行なった。クチュの死後総帥となったベルグテイ家のコウンブカの下でも同様であった。コウンブカの召喚後は、彼が総帥となり「馬歩軍都元帥」と呼ばれた。グユク・ハン時代も彼はスベエテイとともに対南宋前線軍の総帥であった。

憲宗モンケ・カアンの五年（一二五五）に没するまで、彼を対南宋前線軍、「蒙古漢軍」の総帥「都元帥」とする体制が続いた。このころ副総帥の任にあったのが、先に述べたB・ブジエク家のイェルゲンであった。チャガンが同時に「尚書省事を兼領」していたと列伝が述べるのは、『集史』の言う「ヒタイの統治権が付加」されていたことを示すのかもしれない。

チャガンには十人の息子がいたが名の分かるのは、長子の②ムカリ（木花里 Mugal）と③布兀刺のみである。ムカリはモンケ・カアンのケシクに侍し、モンケ末年の四川遠征の際の釣魚山攻略の功で「四斡耳柔怯憐口千戸」を授けられる。カアンにつきしたがって移動する四つのオルドの隷属民からなる千戸の長となったのである。これは、父チャガンがチンギス・ハンの千戸で果たした役割と同じである。クビライ政権の成立時の動向はよく分からない。少なくとも積極的に協力はしていない。それに対しクビライは、ムカリに「金五十両、珠二串」を与えて懐柔している。その後、至元四年（一二六

七)には、スベエテイ家の都元帥アジュの麾下で南宋攻略に従い、その功績で「蒙古軍万戸」となる。彼は襄陽攻略戦に参加した後、軍中で没した。彼の直系の子孫については分からない。

③ 布兀刺の子④タチュ(塔出 *Taidu*)が、ムカリの没後この家を代表することになったと考える。父の布兀刺を幼くして亡くしたタチュは長じて後、至元元年(一二六四)にクビライのケシクに入る。四年に祖父チャガンの「食邑の賦税の半ば」を給されることになった。半ばとはいえ、彼がこの家の権益を得たことは、クビライ朝において彼の系統が重視されだしたことを意味する。七年には、「山東統軍使」となり、九年に山東統軍司が山東東路都元帥府と合体して「山東路行枢密院」となった際は「僉枢密院事(行枢密院副使)」となった。<sup>⑤</sup>至元十年、襄陽陥落後に対南宋軍の編成がえが行なわれた際「淮西行枢密院事」となった一人に「山東都元帥塔出」の名が見える。<sup>④</sup>タチュが「都元帥」の職を得たことが分かる。十一年に「淮西行枢密院」が行中書省に改められ、参知政事となるが、翌年「淮東左副都元帥」として、「淮東都元帥」のマングト部族ボロゴンとともに揚州攻略に向かう。揚州陥落後は、至元十三年にF・タガチャル家のスルドタイの死後「江西都元帥」を継ぎ、その「行都元帥府」の組織変遷に伴い江西宣慰使、江西行中書省右丞となり、江西の平定にあたった。張弘範、李恒が蒙古漢軍都元帥となって南宋帝室を追撃した際には、タチュは後方支援にあたった。十七年に入覲し、再び江西行省の統治を命じられたが、間もなく没した。彼の死後、「江西都元帥」の職は再びタガチャル家に戻った。

長子の⑤宰牙がタチュを継いで江西宣慰使となった。都元帥の職を兼ねてはいない。⑥ 必宰牙は征東行中書省左丞となったことが分かるのみである。

現在確認する限り、チャガン家が率いた華北の軍団の長の職は世襲されていない。チャガンの「馬歩軍都元帥」は、死後B・ブジュク家のイェルゲンが継ぎ、ムカリの「蒙古軍万戸」は子孫が不明のため継承されたかどうか分からず、タチュの「淮東副都元帥」も子孫は継がず、最終的に務めた「江西都元帥」はF・タガチャル家のものであった。なお軍府名は職名に「府」を付したものであった。

チャガン家の本拠地の決定も難しい。手がかりは三つある。一つは、モンケ・カアンの二年（二二五二）チャガンの功績に対し、汴梁、帰徳、河南（洛陽）、懷、孟、曹、濮、太原の計三千六百六戸が五戸糸戸として与えられ、さらに「諸処の草地」も賜り、合わせて一万四千五百余頃、戸數二万余となったことである。必ずしも五戸糸戸を与えられた地に駐屯するとは限らないが、上記八箇所の内いずれかの地に近接する「草地」に駐屯していたと考える。そして、『元史』卷九五、食貨志三、歳賜ではこの家に与えられた五戸糸戸の所在を「懷孟等処」と記していること、懷孟と帰徳以外は、本稿で考察する他の家系の本拠地に比定されることから、チャガン及びムカリの本拠地は懷孟であった可能性がいちばん高いと考える。

あと二つの手がかりはタチュについてである。彼がチャガンの食邑の半ばを得たことは先に述べた。もうひとつは至元十一年、彼が淮西の安豊・廬州、寿州を攻略して得た「生口万余」を献上したことに對し、「曹州の官園を以て第宅と為し、城南の閑田を給して牧地と為」したことである。曹州はチャガンに与えられた五戸糸戸の所在地の一つである。また、タチュの経歴の前半は山東に関わるものである。そこで、この家のタチュの系統はチャガンの曹州、濮州の權益を受け継ぎ、本拠地を曹州郊外に置いていたと考える。ただし、タチュと子の宰牙が江西攻略と統治に関わっていた時期にこの本拠地がどうなったかは分からない。マングト部族のボロゴンの娘を娶った次子の必宰牙がここに留まっていたのかも知れない。

① チャガン家に関する記述は、系図を含め、主に虞集「立只理威忠惠公神道碑」(『道園類稿』卷四二)、『元史』卷二〇、察罕伝、卷一三五、塔出伝、および『集史』部族考タングト部族の項による。塔出伝では、彼の父が布兀刺であったことを記すのみで、チャガンとの繋がりについては記していない。両者の血縁関係を証明するものが、⑥必宰牙の曾祖父がチャガンであることを述べる許有壬「故漕運同知粘合公妻逸的氏墓志銘」(『至正集』卷五八)である。この墓志銘の存在は、松

田孝一氏から教示された湯開健「元代西夏人物表」(『甘肅民族研究』一九八六年第一期)により知った。補注② Rashid, 28b/1~2, *Am-saqe*, pp. 327~328. チャガンがチンギス・ハンに知られることになった挿話が、『元史』察罕伝に載るが、『集史』では、チャガンに次いでハンの千戸を率いたヌラ・ンヤン(NWRH/BWRH NUYAN)に引継ぐ話となっている。なお、*Shrab-i Panigana*のチンギス・ハンのアミールの筆頭に彼が挙げられている

(Topkapi Sarayı Muzesi, Kitüphanesi, Ahmet 2937, 105b. 本田

實信「チンギス・ハンの千戸」、『モンゴル時代史研究』(三一頁)。

③ 『元史』卷七、至元九年正月壬午の条。

### E・マングト部族ボロゴン家<sup>①</sup>

この家は、チンギス・ハンにアングドとして協力したマングト Mangyud 部族のクイルダルの子孫ではあるが、嫡系の「マングト郡王家」ではない。郡王家から分かれた初代のジャムカ(蘇木曷 Jamqa)と二代の瑣魯火都の事績は分からない。そこで、三代目の①ボロゴン(博羅歡 Borokan)を以て家の名とする。なお、チンギス・ハン時代に郡王家のクイルダルと子のモンコ・カルジャは各々左翼の千戸長であり、チンギス・ハンの死後はトゥルイの相続分に入った。<sup>②</sup>

さて、①ボロゴンは、十六歳でマングト部族の断事官となる。当時華北に所領をもつ諸王や勳臣は、城居の漢人との關係を担当する断事官を置いていたという。ボロゴンはマングト郡王家の所領である山東の泰安州にいたことがわかる。

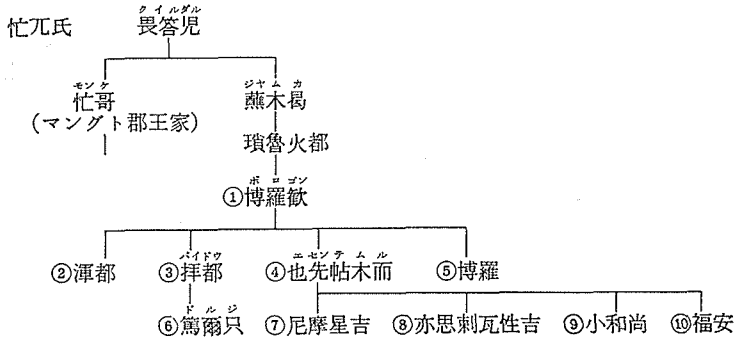
クビライ政権成立時にはアリクブケ軍と戦い、ついでクビライのケンクに入った。分家の彼の行動はマングト部族全体がクビライ側についたことを示すと考える。山東の李璫の乱では、クビライからマングト部族の一軍を率いることを命じられ、済南の包圍、益都、萊州の殘党平定をおこなった。その後、雲南王フゲチの暗殺事件を解決し、その功でクビライからマングト部族の事項は彼が管轄するよう命を受けたという。さらに「右衛親軍都指揮使」として、大都では右衛親軍の、上都では右中左三衛の親軍の長となる。クビライに従って夏營地冬營地を移動していたのである。これらの彼の行動は、すべてクビライのケンクの將軍としてのもつと考える。

至元十二年(一二七五)、中書右丞であった彼は「淮東都元帥」を兼ね「山東経略司」の管轄していた軍を吸収して、山東から直接南下して南宋淮東の要衝揚州の攻略に向かう。淮東平定後の十四年に応昌のオンギラト部族のジルワダイの反乱鎮定の功で、同署枢密院事、北京行省右丞となるが、まもなく召喚される。十六年、哈刺斯、博羅斯、斡羅罕らの紛争

④ 『元史』卷八、至元十年四月癸未朔の条。

⑤ 『元史』卷九五、食貨志三、歲賜、勳臣の「塔出万戸」と、このタ  
チュとの關係は未詳。

系図E：マングト部族ボロゴン家



行省平章政事になった後、召喚されて開府儀同三司、翰林学士承旨として大都に居住し、そこで没した。

⑤博羅は陝西行省平章政事、⑥ドルジ（篤爾只 Dorkhi）は宮廷の裝飾品や衣料製造を担当する将作院の判官となり、⑦尼

調停にあたり、十八年に甘肅行省右丞として対カイドゥ戦線の軍需供給にあたる。二十年には一転して江南行御史台御史大夫となった。至元二十四年（一二八七）のオッチギン家のナヤンの乱にはマングト、ウルウト、ジャライル、オンギラト、イキレス部族のいわゆる五投下の軍を率いて戦った。二十八年の河南行省設立にあたり平章政事となる。

成宗テムル時代は湖広行省平章政事となった後、大徳四年（一二三〇）に江浙行省平章政事として臨安で没した。

②渾都には山東宣慰使となったが、軍団長としての履歴は認められない。③バイドゥ（伯都 Baide）も江東道廉訪副使、江南行御史台の侍御史と御史大夫、陝西行御史台御史大夫といった行台の官、甘肅行省平章政事、および「僉書樞密院事」として成宗テムルのケシクのシャリベチ（舎児別赤）を管轄したことが知られるが軍団長の職を継いだことは認められない。

ボロゴンの軍団長の職を受け継いだと考えられるのは、④エセンテムル（也先帖木而 Esen-temür）である。彼は武宗朝において「山東河北蒙古軍都万戸」兼知樞密院事であった。さらに仁宗即位時も七名の「知樞密院事」の一人として、キプチャク部族チョングル、トガチ・バートルらとともに軍事の首脳であった。③

河南行省と江西行省の参知政事、河南行省左丞相を歴任した。英宗朝に入り河南

摩星吉はマンガト宗家を継ぎ郡王と称し、⑧亦思刺瓦性吉はオルドの財産、所領、軍隊を管轄する中政使の一人となったことが知られるが、エセンテムルの軍団長の職を受け継いだことが分かる者はいない。履歴の分からぬ⑨小和尚、⑩福安<sup>④</sup>が継いだ可能性もある。

この家が率いた軍団の長の職名はボロゴンの「淮東都元帥」からエセンテムルの「山東河北蒙古軍都元帥」と変わる。軍団組織の変化によるものと考ええる。軍府名はやはり職名に「府」を加えたものである。

ボロゴン家の本拠地は山東の泰安州である。それは彼がマンガト部族の華北での所領の断事官であったことに基づく。いったんは大都近くの檀州西北の太行山に葬られたボロゴンの神道碑が、延祐四年(一三一七)にエセンテムルにより泰安州の城外に立石されていることは、泰安州が本拠地であり続けたことを示すと考える。<sup>⑤</sup>

① ボロガン家に関する記述は、主に姚燧「平章政事忙兀公神道碑」

《國朝文類》卷五九、『山左金石志』卷二三、吳澄「故光祿大夫江南

諸道御史大夫魯國元獻公神道碑」《臨川吳文正公集》卷二三、『元

史』卷一一、博羅欲伝による。

② 本田「チンギス・ハンの千戸」、三五頁。

③ 『元史』卷二四、仁宗本紀一、至大四年三月是月の条。

④ この二人の名は、程鉅夫「応州覚興寺長明燈記」《楚園文憲公雪牋

程先生文集》卷一三、錢大昕『潛研堂金石文跋尾』卷一九、「長明燈

記」(延祐七年二月)による。

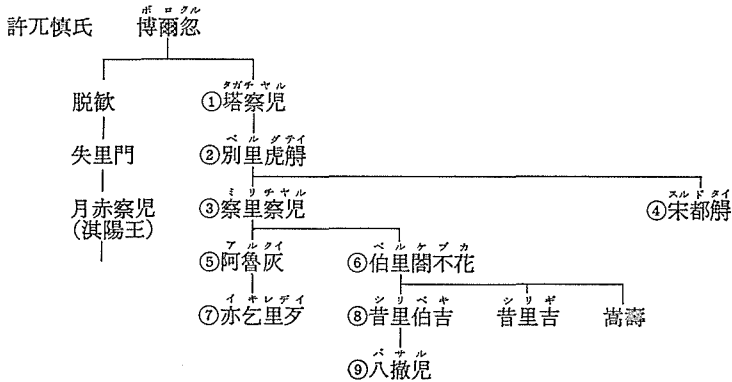
⑤ 本節註①の「忙兀公神道碑」《山左金石志》所収)の末に立石年次が記されている。なお、バイドクが引退後に居住した淮東の高郵もこの家に関係する地であったと言える。しかし、彼には高郵の万戸府を率いたとする史料は無い。

## F・フウシン部族タガチャル家<sup>①</sup>

先に述べたように、この家については松田孝一氏の論考がある。そこで、歴代の軍団長としての履歴などについては略述する。

この家は、チンギス・ハンの「四駿」の一人でフウシン *Huifeng* 部族の右翼副万戸長ボロクル・ノヤンの子孫であるが、

系図F：フウシン部族タガチャル家



二年七月、彼を長とし、漢軍万戸武秀、張榮實、李恒、兵部尚書呂師夔らを副とする「行都元帥府」が設けられ、江西経略を担当することになった。⑤そこで、彼は「江西都元帥」「隆興出征都元帥」と称された。「江東西大都督」を兼ねたとい

元代に淇陽王に封じられた宗家ではない。そこで分家の初代①タガチャル（塔察兒 Tagachal）を以て家の名とする。

さてタガチャルはボロクル・ノヤンと同じくチンギス・ハンのケシクでコルチとして仕えたという。オゴデイ時代に入り、彼は「行省兵馬都元帥」として、対金朝戦に向かった。蔡州包圍戦では主将として南宋の孟珙と共に金朝を滅ぼした。

②ベルグテイ（別里虎解 Borigebokha）は、父の職を継ぎ、「行省兵馬都元帥」の印を授かり、「四万戸の蒙古軍馬并びに諸翼の漢軍（蒙古漢軍）を将領した。そして、兩淮経略に従い、一二五八年に戦死した。その時、襄陽の北の樊城攻撃中であつたというのは、『元史』本伝の誤りと考える。③

③ミリチャル（密里察兒 Mirichar）はクビライ政権成立後間もなく「河南統軍使」となり、中統五年（一二三四）には河南統軍司麾下の「保甲丁壮射生軍達魯花赤」となる。松田氏は、彼がこの時期河南における総司令官の地位を占めたというが従いがたい。④至元四年（一二六七）になって、ミリチャルは「蒙古万戸」を継ぎ、襄陽の北の樊城攻撃中に没した。

④スルドタイ（宋都魯 Suldai）は、兄のミリチャルを継いで至元七年（一二七〇）に「蒙古万戸」となる。南宋の荆湖北路の平定を担当した。至元十



う。さらに福建、広東への経略を計画したが十三年十月に没した。

⑤ アルクイ(阿魯灰 *Argai*)がスルドタイの後を継ぎ、チャガン家のタチュの死後、至元十八年「江西道都元帥」となったがまもなく没した。

至元十九年(一二八二)、アルクイを継いだ⑥ベルケブカ(伯里閣不花 *Berkebuga*)は「江西道都元帥」を経て、「蒙古軍都万戸」となった。成宗テムルの大徳三年(一二九九)には、後の武宗カイシャンのアルタイ方面出征にしたがい、称海での屯田を担当する。その任の途中の六年「河南淮北蒙古軍都万戸府副都万戸」となった。延祐元年(一三二四)八月没した。

⑦ イキレデイ(亦乞里歹 *Ikhelei*)は襲替年次は分らないが、「蒙古軍万戸」となり、順帝の至正六年(一三四六)にはその職を⑧バサル(八撒兒 *Basar*)に譲っていたことが確認される。

⑧ シリベキ(昔里伯吉 *Shirbeki*)は、英宗の延祐二年(一三一五)四月に「河南淮北蒙古軍都万戸府副都万戸」を継いだ。少なくとも順帝の至正六年(一三四六)までは「河南淮北蒙古軍都万戸府副都万戸」であったことが確認される。

⑨ バサルは至正五(一三四五)～六年(一三四六)に「河南淮北蒙古軍都万戸府万戸」であったことが確認される。

この家が受け継いだ軍団長の職名は四つに整理できる。第一は「行省兵馬都元帥」で、タガチャルからベルグテイに受け継がれる。第二は「蒙古軍万戸」で、後には「河南淮北蒙古軍万戸」と変わる。ミリチャル、スルドタイ、アルカイ、ベルケブカ、イキレデイ、バサルと受け継がれる。第三は「江西都元帥」でスルドタイ、アルクイ、ベルケブカと歴任し、それ以後は継がれない。第四は「河南淮北蒙古軍副都万戸」で、ベルケブカからシリベキに受け継がれる。軍府名については、「河南淮北蒙古軍都万戸府」が確認できる。またバサルが率いていた軍団は彼の名を付して「八撒兒万戸府」と呼ばれ、「河南淮北蒙古軍都万戸府」に属していた。

この家の本拠地は、山西聞喜の東鎮である。この家系に関わる石碑もここに集中する。<sup>⑩</sup>

⑩ タガチャル家についての史料は、胡聘之『山右石刻叢編』所収の、「昭勇大將軍万戸八撒兒德政碑」、「遷修洞霞鎮記」(卷三四)、「大元鎮

國上將軍河南淮北蒙古軍都万户府副都万户—忽神公神道碑銘」「景福院記」、胡聘之の編による「許兀慎氏世系表」(卷二七)、および『元史』卷一一九、塔察兒伝である。はしがき註②松田論文もこれらによる。補注⑥

② 那珂通世は、このタガチャルをチンギス・ハンの西征の際、ジェベやスベネテイとともにホラズムシャー・ムハンマドを追撃したトクチャル(脱忽察兒)、ウゲデイ時代阿刺朮とともにジャムチの管理を任されたトクチャル(脱忽察兒)に比定している(那珂前掲書、五〇頁)。同一人物であればスベネテイとの繋がりも廻り得るが、先のブジエックと同様に伝記史料には何ら記述がなく判断しがたい。

③ 『元史』『宋史』本紀には、この年に襄陽での戦闘の記事は無い。

『元史』塔察兒伝はミリチャルの伝記部分がほぼ脱落しており、彼の死の記事のみがベルグテイの死の紀年と結び付けられたと考える。

④ 例えば河南の中心地汴梁を本拠としたスベネテイ家のアジュは、至元六年に正二品下の驛騎衛大將軍を授けられ、その後も昇進するが、タガチャル家は元末に至るまで、正三品中・下の昭毅大將軍、昭勇大

### G・ジャライル部族チヨルカン家<sup>①</sup>

この家についても松田氏の論考があるため、相違点以外は先に同じく略述する。

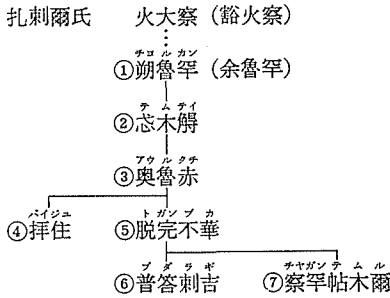
この家の事績の分かる最初の人物は、豁火察であるが、名称に問題があるため、その子チンギス・ハンの千戸長の一人の①チヨルカン(朔魯罕 *Conghan*)の名を以て家名とする。この家もジャライル部族であるが、ムカリの「国王家」ではない。チヨルカンは、『秘史』の八八功臣の第四十五位に「余魯罕 *Yunrebunhan*」として名は載るが、『集史』「チンギス・ハンの軍隊」には名が無く、分属の際は誰の相続分に入ったか分からない。複数の千戸を管轄する上級千戸長が任命権を持つ

將軍であった。この差が中統五年(至元年)当時逆転していたとは考えられない。家系の上下関係は、軍団組織を考える際に改めて考察したい。

⑤ 『元史』卷八、至元一二年七月癸未の条。

⑥ 聞喜は元代に平陽路に属する。またこの家はモンケ・カアン(二年(一二五二))平陽の二百戸を与えられている。この平陽路に四万戸余りの大所領を有したのはジョチ家であり(『元史』卷九五、食貨志三、歳賜)、ジャルグチを通じて統治に関与していた(例えば『道光』直隸霍州志』卷二五「元初経始公辟橋道記」に載る一二三七年頃のバトゥの令旨に基づく割付)。ジョチ家に属した四千戸長の一人がフウシン部族のフウシグタイであること(*Ragshai Tai*)と、この家が聞喜に鎮し、平陽にわずかながら所領を有したことは関係があると考ええる。なお、金朝征服以前のタガチャルは、フフホト東方の官山を本拠としていた。この地の重要性は注目すべきである(前稿註⑥)。

系図G：ジャライル部族チオルカン家



「下級千戸長」であったと考える。<sup>②</sup>

チンギス・ハンの六年(一二二二)、金との野狐嶺の戦で戦死した①チオルカンの千戸を継いだのは②テムテイ(忒木解 Tamiho)である。<sup>③</sup>彼は、カンクリ遠征、西夏遠征に活躍した功績でオゴデイから「都行省の事を行する」ことを命じられ、ウルウト、マンガト、イキレス、オンギラト、ジャライルの五部族の軍を率いて河南平定を行なった。帰徳攻撃では主将であった。功績により二千戸を賜り、山西の太原、平陽と河南(洛陽)に駐屯した。

②アウルクチ(奥魯赤 Auruqi)は初めモンケ・カアン(ケシク)に仕え、その四川の釣魚山攻撃に参加した。クビライ政権成立時の行動は不明である。至元五年(一二六八)「蒙古軍万戸」となって襄陽攻撃に参加し、翌年昇進して父の職を継ぎ、「蒙古軍四万戸を領し」た。南宋平定と統治に伴い、まず行中書省参知政事、左丞として湖北道宣慰使を行った。次に右丞、荆湖行枢密院副使となる。これらの間も「蒙古軍万戸」の職は帯び続けていた。至元二十三年に湖広行省平章政事となった。同じ年に鎮南王トゴンのヴェトナム遠征のために湖広行省が設けた安南

行中書省、交趾行尚書省の平章政事となり、それに伴って子の⑤トガンブカ(脱完普華 Topanbuqa)に万戸の職を譲った。戦後は江西行省平章政事、湖広行枢密院の同知枢密院事を歴任した。成宗朝に入り再び江西行省平章政事に任じられ、大徳元年(一二九七)に没した。

④バイジュ(拜住 Baizhi)は、「蒙古侍衛親軍副都指揮使」となったことしか分からない。

⑤トガンブカは、アウルクチから「万戸」職を受け継いですぐに、ナヤンの乱鎮圧に従軍した。行中書省左丞と「蒙古軍都万戸」を兼ねた。成宗テムル没後の仁宗アユルバルワダ母子のクーデターに協力した功績で湖広行省平章政事、左丞相に至ったが、

その時も「蒙古軍都万戸」は兼ねていたと考える。

⑥ ブダラギ(普答刺吉 Budaragi)は、河南行省右丞、同知枢密院事を兼ねる一方で、泰定年間に「都万戸」として「四万戸蒙古軍」を統括していたことが確認される。天曆の内乱では、大都の文宗トクテムル側につき、紫荆関の防衛を担当したが敗死した。

⑦ チャガンテーム(察罕帖木爾 Čayan-temu)は、兄を継ぎ、文宗朝で「河南淮北蒙古軍都万戸」となった。少なくとも順帝の至正六年(一三四六)まではその職にあったことが確認できる。

この家が継いだ軍団の長の職名は三つに整理できる。第一は、チオルカンからテムテイに継がれた「千戸」である。その後は不明。第二は、テムテイの『行都行省』、アウルクチの『領蒙古軍四万戸』、トガンブカの「蒙古軍都万戸」、ブダラギの四万戸蒙古軍を管する「都万戸」、チャガンテームルの「河南淮北蒙古軍都万戸」と継がれていったものである。『』で示したような、職名として固定されていないものも含むが、これらは実質的には同じものである。第三は、「蒙古軍万戸」でアウルクチからトガンブカに継がれている。第二と第三の職名との関係を知るには、軍団組織の考察が必要である。この家はテムテイの時期には山西の太原、平陽、河南の懷州、洛陽に分散して駐屯していたらしい。アウルクチの代に至り、洛陽の南の龍門山麓を本拠とし、トガンブカがそこに都万戸府の建物を建設した。

① チオルカン家についての主な史料は、許有壬「有元札刺爾氏三世功

(普答刺吉)の子としているが誤り。

臣碑銘」(『至正集』卷四七)、李元魯「河南淮北蒙古軍都万戸府増

② 本田「チンギス・ハンの千戸」、二二頁。

修公廨碑銘」(『中州名賢文表』卷三〇)、『元史』卷一三一、奥魯赤伝である。はしがき註②松田論文もこれらによる。なお、錢大昕は『元史氏族表』卷一のこの家の項で、「或いは、木華黎(ムカリ)の近属と曰う」と述べているが、典拠を示していない。なお、松田氏が論考の中に挙げた系図は、⑦チャガンテームル(察罕帖木爾)を⑥ブダラギ

③ 那珂通世が彼をオゴデイ・カアンのケシクの侍衛第二班の宿老帖木迭児(テムデル)にあてる(那珂前掲書、六七～七〇頁)のは誤りである。オゴデイのケシクの長テムデルは、スニート部族である(本田「チンギス・ハンの千戸」、二四～二五、三五頁)。那珂が『元史』鉄邁赤伝の行省鉄木迭児に当てるのは妥当と考える。

## 結 び

以上元代華北のモンゴル軍団長七家について、1. その家系の特徴を述べ、歴代の人物の略歴から、2. 軍団長としての職名、軍府名、と3. 本拠地について検討を加えてきた。1と3を整理したものが表1「華北のモンゴル軍団長の家系の特徴と本拠地」、2の軍職を整理したものが表2「華北のモンゴル軍団長の家系の軍職承襲表」である。そこで表を参照しつつ、それぞれについて考える。そして最後に、軍団長の家系の国家体制への位置付け、中国支配への関わりについて考えてみたい。

### 1. 家系の特徴

家系の特徴については、①部族や家の性格、②チンギス・ハンとの関係、③チンギス・ハン没時の分属の三点から考察したい。

①部族や家の性格。七家ともトルコ・モンゴル部族である。タングト人のD・チャガン家はチャガンがチンギス・ハンによってモンゴル人の扱いを受けた家であった。また、漢人軍閥出身の張弘範とタングト人旧西夏国王の子孫李恒が「蒙古漢軍都元帥」となったのも南宋帝室他を追討した期間のみで、子孫もこの職に就いたものはない。しかも、漢人が「蒙古軍」を指揮したのは異例のことと考えられた。他にトルコ・モンゴル部族以外でモンゴル軍団長となった者も管見の限り無い。モンゴル軍団長となったのはトルコ・モンゴル部族の家系に限られると考える。ところが七家には有力部族長の家が一つもない。有力部族出身や右翼副万戸長の子孫であっても部族長の宗家ではない(B・ブジェク家、E・ボロゴン家、F・タガチャル家、G・チョルカン家)。譜代の隸臣(ölegü boyol)の部族でしかも部族長でない(A・スベエテイ家。なお、ジャライルも譜代の隸臣の部族)。チンギス・ハンに滅ぼされた国の重臣の家である(C・マチャ家、D・チャガン家。またジャライル、イキレス、バアリン、オンギラト、オングト、マングト、ウルウトなど有力部族長の家で元代華北のモンゴル軍

表 1. 華北のモンゴル軍団長の家系の特徴と本拠地

A. ウリヤンカン部族スベニテイ家	<p>家系の特徴(①部族・家の性格；②チンギス・ハンとの関係；③チンギス・ハン没時の分属)</p> <p>① 譜代の諍臣の部族。部族長でない。トゥルイ家との結び付きが強い。</p> <p>② スベニテイは、チンギス・ハンの千戸長。チンギス・ハンのノコル。「四狗」の一人。</p> <p>③ トゥルイ家・左翼。</p>	華北での本拠地。( )内は現在の省名
B. ジャライル部族ブジエタ家	<p>① 有力部族、ただし「國王」家でない。イェルゲンはトゥルイの庶子のケシクの長。</p> <p>② ブジエタがケシクでコルチ、バウルチを務める。</p>	汴梁(河南) 曹州(山東)
C. ナイマン部族マチャ家	<p>① チンギス・ハンに滅ぼされたナイマン國の重臣の家。ナンギヤダイはA. スベニテイ家のアジユの都元帥府の経歴。</p> <p>② 不明。</p>	濮州(河南)
D. タングト部族チャガン家	<p>① チンギス・ハンに滅ぼされた西夏國の重臣の家。</p> <p>② チャガンがチンギス・ハンの「第五子」としてモンゴル人の身分を得る。チンギス・ハン自身の千戸の第一百戸長としてその千戸を統括。</p> <p>③ トゥルイ家・中軍。</p>	懷孟(河南) タチュの系統は曹州(山東)
E. マングト部族ボロゴン家	<p>① 有力部族。クイルダル(左翼千戸長)の子孫。ただし、宗家でなく、華北の所領の断事官の家。</p> <p>② 宗家のクイルダルはチンギス・ハンのアンダ。</p> <p>③ トゥルイ家・左翼(宗家)。</p>	泰安州(山東)
F. フウシン部族タガチャル家	<p>① チンギス・ハンの「四駿」の一人で、右翼副万戸長ボロクルの子孫。ただし、宗家ではない。</p> <p>② タガチャルがチンギス・ハンのコルチを務める。</p> <p>③ トゥルイ家・右翼(宗家)。</p>	聞喜東鎮(山西)
G. ジャライル部族チュールカン家	<p>① 有力部族。ただし「國王」家でない。</p> <p>② チュールカンは、チンギス・ハンの千戸長(下級)。</p> <p>③ 不明。</p>	太原(山西)、平陽(山西)、洛陽(河南)。アウルクチから洛陽の南郊の龍門(河南)。

表 2. 華北のモンゴル軍団長の家系の軍職承襲表

A. スベエテイ家

スベエテイ：太祖期～ 千戸



ククチュ(ククテイ)：千戸→ ～中統 3 (1262)都元帥



ウリャンカダイ：憲宗期 千戸



アジュ：中統 3 (1262) (征南)都元帥→至元 9 (1272)蒙古(軍)都元帥

B. ブジユク家

ブジユク：太祖期 コルチ, バウルチ



イェルゲン：太宗期 コルチ, バウルチ→ジョリケのケシクの長→天下馬歩都元帥→憲宗期 諸翼軍馬都元帥



アラガン： 世祖至元 4 (1267)上万戸←憲宗 8 (1258)諸翼軍馬都元帥



拝降： 至元18(1281) 万戸



イェスデル 成宗元貞元(1295)左手蒙古軍万戸→文宗天曆元(1328)山東河北蒙古軍都万戸  
→天曆 2 (1329)山東河北蒙古軍大都督

C. マチャ家

マチャ：(総管蒙古漢軍)

ナンギャダイ：世祖期 都元帥府経歴→至元10(1274)漢軍千戸→至元15(1279)以前蒙古軍副都万戸・万戸→至元18(1282)都元帥→建康万戸→蒙古軍都万戸→武宗期 蕪鼎万戸府 達魯花赤



教化： 山東河北蒙古軍副都万戸



トガン： 山東河北蒙古軍大都督

D. チャガン家

チャガン：太祖の千戸の第一百戸長としてその千戸を管轄(御帳前首千戸)→馬歩軍都元帥



ムカリ：憲宗の四斡耳朶怯憐口千戸→蒙古軍万戸  
ブジユク家イェルゲン  
タガチャル家スルドタイ



タチュ：至元 7 (1270)山東統軍使→→山東都元帥→至元12年(1276)  
淮東副都元帥→至元13(1277)江西都元帥



タガチャル家アルクイ

元代華北のモンゴル軍団長の家系（提）

E. ボロゴン家

ボロゴン：至元12(1275) 淮東都元帥



エセンテムル：武宗・仁宗期 山東河北蒙古軍都元帥

F. タガチャル家

タガチャル：太祖期 行省兵馬都元帥



ベルグテイ：憲宗2(1252) 行省兵馬都元帥



ミリチャル：世祖至元5(1268)

蒙古軍万戸



スルドタイ：世祖至元7(1270)

蒙古軍万戸→

至元12(1275)江西都元帥



↓ チャガン家タチュ 至元13(1276)江西都元帥



アルクイ：

蒙古軍万戸→

至元18(1281)江西都元帥



ベルケブカ：成宗大徳6(1302)

↓

↓

河南淮北蒙古軍副都万戸←

↓

↓

↓

↓

↓

イキレデイ：

河南淮北蒙古軍万戸

シリベキ：順帝至正年間 河南淮北蒙古軍副都万戸

バサル：文宗期～順帝至正年間

河南淮北蒙古軍万戸

G. チョルカン家

チョルカン：太祖期 千戸



テムテイ：太祖6(1211)千戸→太宗期

「行都行省」



アウルクチ：至元5(1268)蒙古軍万戸→至元6(1269)

「領蒙古軍四万戸」



トガンプカ：至元23(1286)蒙古軍万戸→

↓

↓

ブダラギ：泰定年間

↓

↓

チャガンテムル：文宗期～順帝至正6(1346)～

↓

↓

↓

↓

↓

↓

↓

↓

↓

↓

↓



団長になったものはいない。

② チンギス・ハンとの関係。チンギス・ハンと個人的な繋がりを持つ者が多い。チンギス・ハンの第五子と呼ばれ、第一百戸長としてハン自身の千戸を統括したチャガンはその筆頭と言える。ハンのノコル (Nokor) であつたスベエテイも繋がり深いと言える。彼はチンギス・ハンがジャムカと訣別した時に兄弟で来属し、ケシクに編成され、一二〇六年のチンギス・ハンの即位の際、千戸長となつたのである。チョルカンもこの際の八十八人の千戸長の一人であつた。なお、スベエテイは、「己が獲ち得たる、己が集め置きたる〔民草ども〕によりて、千〔戸〕の長とな」つた、すなわち戦功によって得た分け前の人口をもとにして千戸集団を形成したものであつたことにも注意したい。チョルカンは下級千戸長であつた。ケシク出身者も二人いる。コルチ、バウルチを務めたブジエクとコルチを務めたタガチャルである。ただし、両者ともその長ではなかつた。マチャに関しては直接に關係を示すものがない。

③ チンギス・ハン没時の分属。中軍、左右両翼、諸弟諸子への千戸の分属の際、どこに属したかを考える。その家は千戸長でないが宗家は千戸長の者も考えに入れる。するとトゥルイに与えられた中軍、左右両翼に属した者はいるが、諸弟諸子に属したことがはっきり分かる者はいない。中軍はチャガン、左翼はスベエテイとポロゴン家の宗家のクイルダルとモンコカルジャである。右翼はタガチャル家の宗家のポロクルである。チョルカンについては分からない。これだけでは特徴は見出だしたい。ただし本拠地との関連を考えれば、おおよそ左右翼が華北での東西に分かれる傾向のあることが予想される。右翼のポロクルの分家のタガチャル家の本拠地聞喜は左翼のスベエテイ家の汧梁、ポロゴン家の泰安州に比して西方にある。これについては軍団の構造を合わせて考察する必要があると考える。

## 2. 軍団長の職名と軍府名

まず以下の三点を確認しておきたい。第一は軍団長の世襲が行なわれていること。第二は軍団長の職を帯びたまま、主に江南の行省、行台、行枢密院、および枢密院の高官を兼ねている例が多いこと。第三は行省などの高官は世襲していな

いが、軍団長でないものも含め歴代が同一地域の官に就く傾向が見られること。これらの点については今後分析を加える必要があろう。

表2を見れば、スベエテイ家が「蒙古軍都元帥府」の長、ブジエク家、マチャ家、ボロゴン家が「山東河北蒙古軍大都督府」またはその前身の「山東河北蒙古軍都万戸府」の長であり、タガチャル家とチヨルカン家が「河南淮北蒙古軍都万戸府」の長であったことが分かる。これらの三軍団の組織と沿革の検討が次の段階として必要になる。チャガン家についてはにわかには決めがたい。オゴデイ期からモンケ期にかけて華北の対南宋戦の総帥であったチャガンの死後、クビライ政権になってこの家の地位が低下したと考える。なお、軍府名は、職名の後に「府」を付したもので、またはさらに職名の前に当時その職にある人物名を付したものであった。

一つの家が同時に複数の軍団長の職を有する例に注目すべきである。タガチャル家の「河南淮北蒙古軍副都万戸」と「(河南淮北)蒙古軍都万戸」である。この理由を知るには軍団組織の考察が必要になる。

なお、軍団長の世襲を確認できる期間は、家によって異なる。スベエテイ家の「蒙古軍都元帥」はアジュの没時の至元十七年(一二八〇)までしか確認できないが、ブジエク家、マチャ家は文宗期まで、ボロゴン家は仁宗期まで、タガチャル家とチヨルカン家は順帝至正年間まで確認できる。理由は史料の残り具合にもよるが、政争に絡む家の盛衰、軍団の組織変更も考えられる。軍団の沿革の考察が必要と考える。

### 3. 本拠地

本拠地への駐屯の年次を確定できるものは少ない。しかし、いずれも太宗オゴデイ時代の金朝征服戦、その直後からの対南宋戦が関わりのはじめと言える。なお、各家本拠地の位置の性格、配置と軍団組織との関係についての検討が次の段階として必要と考える。

以上1)~3)の考察は、次の様にまとめられよう。元代華北のモンゴル軍団長の家系は、トルコ・モンゴル系で、有力部

族長の家ではなく、多くはチンギス・ハンとの個人的な繋がりを持つものを祖先に持つ。そして、オゴデイ・カン時代  
の金朝征服戦、対南宋戦を華北への駐屯の始まりとした。南宋征服戦を實行し、軍団長の職を世襲するとともに、行省、  
行台の高官を務めるなど江南支配に重要な役割を果たした。中には大カン位をめぐる政争に重要な役割を果たした家も  
現われた。<sup>④</sup>

これらの特徴を持つ元代華北のモンゴル軍団長の家系は、元朝の国家体制および中国支配にどう位置付けられるだろう  
か。検証すべき事柄は数多いが、以下のような見通しを立ててみたい。まず、彼らを王族や有力部族長の家系と対比して  
みる。王族や有力部族長の家系は、本拠をモンゴリア等に持ち、華北、江南に所領を有した。有力部族長の家系は、元朝  
内外の高官を務めた。南宋征服戦にはほとんど参加していない。一方、華北のモンゴル軍団長の家系は、チンギス・ハン  
との個人的な結び付きを持つ者を先祖に有しても、前者に比して家格は低い。彼らは華北を本拠とし、華北、江南に所領  
を有する場合も規模は大きくない。南宋征服戦を遂行し、主に江南（及び河南）の行省、行台の高官を務めた。このように  
比較すると、両者の重層的な構造が想定できる。

では、華北の漢人軍団、旧南宋軍団の長の家系はどうか。両者については今後の分析を期したいが、次のことが知られ  
る。漢人軍団は、モンゴル軍団とともに南宋征服戦を行ない、より南方まで進攻した。戦後華北の本拠を残したものはい  
るが、江南に移駐したものも多い。軍団長の家系は、江南（及び河南）の行省の高官を務めている。旧南宋軍団は「新附軍」  
と呼ばれ、江南に駐屯した。これらも先の重層構造の下に位置付けられる。元朝の国制、中国支配は、軍団長の家に注目  
すると、少なくとも四層の構造になっていたと考えるのである。

今後への課題は、上記の諸項の検証であるが、まずは「蒙古軍都元帥府」「山東河北蒙古軍大都督府」「河南淮北蒙古軍  
都万户府」三軍団の組織と沿革、軍団の配置と組織の関係、各家の行省などの高官への就任地域についての研究が次の段  
階として必要であると考える。これについては別稿を用意して論じなければならぬ。また、本稿は軍団長の家系を考察

対象とし、麾下の軍にはほとんど触れなかった。これも、元朝交替期にこれらの家系がどうなっていたのかという問題や、南宋遠征で有名なバヤンの政治上上の位置づけの問題などとともに今後の研究課題である。

- ① 「軍団長の家系の探索」の註②および姚燧「中書左丞相李公家碑」  
 『國朝文類』卷二二）、吳澄「滕國李武愨公伝序」  
 『臨川吳文正公集』卷一四）、『元史』卷二一九、李恒伝。  
 ② 本田實信「チンギス・ハンの十三翼」  
 『モンゴル時代史研究』一一～一二頁。  
 ③ 村上正二「遼金元」（和田清編『支那官制発達史』一九四二年）三九二頁で、軍団長の職名を「都万戸」遼蕃花赤」「遼魯花赤」とする点、山東河北蒙古軍都万戸府の大都督府への昇格を大徳四年とする点は誤りである。  
 ④ C・マチャ家の註③の杉山論文、三三頁註⑩にこのタガチャル家を例に挙げた考察がある。さらに例を集めて考察を進めたい。  
 ⑤ 成宗没後の仁宗アユルバルワダ、ダギのクーデタに、スペエテイ家のプリンギダイ、マチャ家のナンギヤダイが関与したことや、「天曆の内乱」でブジユク家のイユスデル、チオルカン家のブダラギが関与したことを指す。「天曆の内乱」におけるイユスデルの行動、乱の経過は、B・ブジユク家註①の「曹南王勳德碑」に詳しく述べられてお

り、この内乱を研究する際に必須の史料である。

- 補注① 孔齊『至正直記』はトゴンに関わる逸話を伝える（巻一「脱欲報庇」「脱欲惡妻」「館賓議論」、巻二「脱欲無嗣」）。これらにより、トゴンはアラカンが臨安攻撃の際に掠奪して妻とした王氏の子であること、彼の死後に女婿虎舎と庶子慶舎が相続争いをしたことが分かる。補注② 屠寄はタチュがチャガン家であることを知っていた。目録のみで文は無いが『蒙兀児史記』卷三九はチャガンとともにタチュを立伝している。『新元史』卷一二六はおそらくそれに倣うが、チャガンの弟の系図を誤る。

補注③ 『元史』塔察兒伝のみタガチャルをボロクルの従孫とする。

『集史』では、ボロクルの子でオゴテイ期に千戸長の後継者 (qatim-e badam) であったジュブクル・クビライ、及びクビライ期にトゥルイの子クトクトウの娘シーリーンを娶ったトゥグチ・グレゲン等の名が挙がるが (Casali, 384, 1985)、漢文伝記史料に彼らにはあらわれない。タガチャルとの関係を含め、ボロクルの子孫の世系には不明の点がある。

（京都大学研修員）

# The Genealogy of Generals of the Mongolian Army in North China during the Yuan Dynasty

by

TSUTSUMI Kazuaki

Because of its historical importance, large numbers of studies have been made on the process of the war between the Mongol Empire-Yuan dynasty and the Southern Song. But only a few studies have been made on the army which carried out the war. The author, concerned with the analysis of the Mongolian army which fought at the front in North China, traced the family-lines of the generals of the army from historical sources, and inquired into the personal histories of these families. The seven families which can be found are the Sübe'etei family of the Uriangqan tribe, the Būjeg family of the Ĵalair tribe, the Mača family of the Naiman tribe, the Čaγan family of the Tangγud tribe, the Boroyon family of the Mangγud tribe, the Tayačar family of the Hū'ūšin tribe and the Čoruqan family of the Ĵalair tribe. Generals from these families had become the chiefs of the "Supreme Marshal Office of the Mongol Army", the "Chief Military Command of the Mongol Armies in Shandong and Hebei", and the "Supreme Myriarchy Office of the Mongol Armies in Henan and Huaibei". These families were of Turkish or Mongolian descent, but they did not belong to the families of the chief of the main tribe. Many of them had an ancestor who had a personal relationship to Činggis qan. During the Ögödei era, they were first stationed in North China, in order to fight against the Jin and the Southern Song. They held the rank of general of the army in their family for generations, assumed high official posts of Branch Secretariat and Branch Censorate, and took part in the rule of South China. Judging from the location of their bases, their domain, government posts and actions the author concludes that they comprised the stratum under the royal family and the families of the chief of the main tribe.